

「アイデアは存在するか——プラトンとアリストテレスの分岐点」

アリストテレス『形而上学』M巻第4章、1078bを読む

序章：この一節、舐めてかかると火傷する

さて諸君、今日の教材はたった数行だ。「なんだ、量少ないな、今日は楽勝じゃん」と思った顔がちらほら見える。前から三列目の君、今スマホしまったな。遅い。

断言しておく。この数行は、西洋哲学史上もっとも密度の高いテキストの一つだ。ヘラクレイトス、クラテュロス、ソクラテス、プラトン——哲学史の主要級が全員この短い文章の中で入れ替わり立ち替わり登場する。しかもアリストテレスは、この一節のあとすぐに「実相(エイδος)は存在するということが色々な仕方で証明されているが、そのいずれも真実らしくない」と、プラトンの遺産を叩き斬る。師匠の師匠(プラトンはソクラテスの弟子で、アリストテレスはプラトンの弟子だ)の学説を、真正面から「証明になってない」と切って捨てる。これは相当な胆力がある行為だということを、まず肌で感じてほしい。

今日は諸君に、プラトンのアイデア論はなぜ生まれたのか、そしてアリストテレス自身の「ウーシアー(本質存在・基本存在)」の考え方はそれとどう違うのかを、徹底的に、手加減なしでやる。覚悟してくれ。

第一章：万物は流転する——ヘラクレイトスという「震源地」

まず出発点はヘラクレイトスだ。「すべての感覚されるものは絶えず流転している」。有名な「同じ川に二度入ることはできない」というやつだな。

ここで一つ脱線させてくれ。私が学生の頃、この「同じ川」の話をゼミで発表したら、ある先輩が「じゃあ〇〇、お前は昨日の〇〇と同じ〇〇か?」と絡んできた。若気の至りで「もちろん同じですよ、記憶も連続してるし」と答えたら、「じゃあ細胞は7年で入れ替わるらしいが、7年後のお前は他人か?」と畳みかけられて、その日の飲み会は全部それで潰れた。.....今思えばこれこそが今日の講義の核心なんだが、当時の私はただ酒がまずくなっただけだった。諸君も、こういう「一見屁理屈に見える問い」を馬鹿にしないでほしい。哲学の九割はこの手の屁理屈から始まる。

さて、ヘラクレイトスの主張を真に受けると、恐ろしい帰結が出てくる。流転するものについて学的認識(エピステーメー)は存在しない、というのがアリストテレスの整理だ。なぜか。「認識する」とは、ある対象について「これはこうだ」と言い切ることだ。ところが対象が刻一刻と変化しているなら、「これはこうだ」と言った瞬間にはもう対象は別物になっている。的が動き続けるなら、狙いを定めることそのものが原理的に不可能になる。

だから、もし何かについて確かな認識や思慮(フロネーシス)を持ちたいなら、感覚されるものとは別の、常に留まる自然のものが存在するはずだ——これが論理的要請として出てくる。ここ、テストに出るぞ。「流転する世界からの認識不可能性」→「不変の対象の要請」という推論の骨格を、丸暗記でいいから頭に叩き込んでおいてくれ。

第二章：クラテュロスという「行き過ぎた男」

ここでもう一人、脇役だが強烈なキャラクターを紹介したい。クラテュロスという人物だ。プラトンの初期の師の一人とも言われる。

クラテュロスはヘラクレイトスの説をさらに徹底させて、こう考えた。「万物が流転しているなら、何かについて言葉で語ること自体が不可能ではないか。語った瞬間、対象はもう変わっている。だったら黙っているのが一番正しい」。

そして伝説によれば、クラテュロスは晩年、言葉で何かを主張することをやめ、ただ指を動かすだけになったという(アリストテレスも別の箇所でのこのエピソードに触れている)。質問されても答えず、指をくいと動かすだけ。想像してみてください、講義中に私が諸君の質問に指だけで応じる姿を。単位はあげられない。

これは笑い話に聞こえるかもしれないが、実は極めて論理的な帰結なんだ。前提を徹底すると沈黙にたどり着く——この構図は、後の懐疑主義や、20世紀のウィトゲンシュタインの「語りえぬものについては沈黙せねばならない」にまで、形を変えて繰り返し現れる。哲学史というのは、実はこの手の「行き過ぎた徹底」と「それに対する修正」の往復運動でできている。

第三章:ソクラテスの穏健さ——普遍を求めても、切り離さない

さあ、ここでソクラテスの登場だ。アリストテレスはこう書いている。「しかしソクラテスは、そのような普遍的なものあるいは諸定義が、独立したものだとは言わなかった」。

ソクラテスは何をしたか。彼は倫理的な事柄(「勇気とは何か」「正義とは何か」)について、個々の具体例をたくさん集めて、そこに共通する定義を帰納的に探求した。これは『対話篇』を読

んだことがある諸君なら覚えがあるはずだ。「勇気ある行為の例を挙げてみよ」「その全部に共通するものは何か」というあの粘着質な問答法だ。

ソクラテスは、個々の勇気ある行為とは別に、「勇気そのもの」という定義・普遍を求めた。ここまではヘラクレイトスの危機に対する正しい処方箋だ。個々の行為は流転するが、「勇気とは何か」という定義は、探求によって固定できる——そう考えた。

しかしソクラテスはそこで踏みとどまった。普遍的な定義は、個々の勇気ある行為とは論理的・概念的には区別されるが、それが独立の实在として、感覚世界とは別の場所に存在するとまでは言わなかったんだ。定義は定義として大事だが、それが「どこか別の世界にぷかぷか浮いている」とまでは主張しなかった。この慎重さ、この「一步手前で止まる」感覚を、諸君にはぜひ味わってほしい。

第四章:プラトンの跳躍——「分離」という決定的な一步

ところが、である。アリストテレスはこう続ける。「ところが、あの人々は、それらを切り離れた」。「あの人々」というのはプラトンとその学派を指す(この場面ではプラトンの名を伏せて婉曲に語るのがアリストテレスの癖だ。師匠の名前を出すのがちょっと気まずいのかもしいな、人間くさくて私は好きだ)。

プラトンは、ソクラテスが踏みとどまった一線を、思い切って踏み越えた。普遍的なもの・定義は、個々の感覚的事物とは存在論的に独立して(コーリス、分離して)存在する——そう主張したんだ。そしてそのように独立して存在するものを「イデア」と呼んだ。これがイデア論の誕生の瞬間だ。

なぜプラトンはそこまで踏み込んだのか。理由は単純明快、論理的整合性のためだ。ヘラクレイトスの前提(感覚されるものは流転する→認識不可能)を受け入れる以上、確実な知識の対象は感覚世界の中には存在し得ない。だとすれば、その対象は感覚世界の外に、独立した仕方存在するしかない。ソクラテスの「普遍は大事だが独立实在ではない」という中途半端な立場は、実はこの論理からすると不安定なんだ。「じゃあその普遍はどこにあるの? 感覚世界の中? でも感覚世界は流転してるんでしょ?」と突き詰められると、答えに窮する。プラトンはその隙間を埋めるために、大胆に「別世界」を用意した。これは論理的には筋が通っている。ここ、大事なところだから太字にしておく。プラトンのイデア論は思いつきではなく、ヘラクレイトスの前提からの論理的必然として出てきたものだ。

余談だが、私はこの箇所を読むたびに、学生時代に付き合っていた人との別れ際を思い出す。「あなたのことは好きだけど、この関係はもう続けられない」という、あの独立と切断の感覚だ.....いや、すまん、今のは完全に脱線だ。忘れてくれ。試験には出ない。

第五章:対比を丁寧に読み解く——「感覚されるもの」と「普遍的なものあるいは諸定義」

さて、問題文の核心にある対比を整理しよう。ここが今日の講義の一番の山場だ。

「感覚されるもの(アイスタタ)」とは何か。個々の、この目で見てもこの手で触れる具体的な事物、あるいはその性質だ。この教壇、この黒板、諸君一人一人の顔。これらは時間の中で生成し、変化し、消滅する。ヘラクレイトスの言う「流転」の主語はまさにこれだ。

「普遍的なものあるいは諸定義(トカトルー、あるいはホイ・ホリスモイ)」とは何か。「人間とは何か」「正義とは何か」「三角形とは何か」といった、個々の事例を超えた、一般的な本質規定・定義のことだ。これは特定の時間・場所に縛られず、恒常的で不変だと考えられる。「三角形の内角の和は二直角である」という定義的真理は、目の前の紙に描かれた歪んだ三角形が破れて消えても、揺るがない。

この二つは、認識の確実性という観点から見ると、正反対の性質を持つ。感覚されるものは移ろいやすいがゆえに知識の対象になりえず、普遍・定義は不変であるがゆえに知識の対象になりうる。プラトンはこの非対称性を存在論のレベルにまで拡張し、「知識の対象になりうるものは、知識の対象になりうるだけの独立した実在性を持つはずだ」と考えた。これがイデア界(可知界)と感覚界(可視界)という、あの有名な二世界論の骨格だ。洞窟の比喻を思い出してくれ、あれもまさにこの対比の劇化にほかならない。

第六章:アリストテレスの反撃——ウーシアーという代案

では、アリストテレス自身はどう考えたか。ここが問1の後半、諸君が本当に書かなければならない部分だ。

アリストテレスは、知識のためには普遍・定義が必要だという点ではプラトンに同意する。ここは譲らない。学問(エピステーメー)は常に普遍的な命題の形を取る、これはアリストテレスの論理学(『分析論後書』)の大原則だ。

しかし彼は、その普遍・定義が、個々の感覚的事物とは別の場所に「分離して」存在する必要はまったくない、と考えた。これがアリストテレスの決定的な一手だ。

代わりにアリストテレスが打ち出したのがウーシアー(本質存在・基本存在、しばしば「実体」と訳される)という概念だ。アリストテレスにとって、第一義的な意味での「ある(存在する)」とは、個々の具体的な「これ」(トデ・ティ、**"this-something"**)、たとえば目の前のこのソク

ラテス、この馬、この木といった個物のことだ。アイデアのような、感覚世界から切り離された普遍的实在こそが真の实在だ、というプラトンの発想を、アリストテレスはひっくり返す。真に実在するのは、この私が今ここで指させる個物のほうだ、と。

では普遍(たとえば「人間」という種)はどこにあるのか。アリストテレスの答えは明快だ。普遍は個物の「中に」内在する。個々の人間(ソクラテス、カリアス、諸君一人一人)は、それぞれ質料(ヒュレー、肉体という素材)と形相(エイドス、人間としての本質規定)の結合体だ。形相こそが、その個物を「人間たらしめている」ものであり、この形相は感覚的個物と離れてどこか別の世界に浮いているのではなく、個物のうちに、いわば内在的に実現されている。これを後世、質料形相論(ヒューレモーフィズム)と呼ぶ。

つまりアリストテレスは、感覚されるものと普遍・定義という対比そのものは認めつつ、その対比を存在論的分離にまで拡大する必要はないと主張したわけだ。普遍は個物から論理的・概念的には区別できるが(この点はソクラテスと同じだ、面白いことに、アリストテレスは孫弟子でありながらソクラテスの慎重さに回帰している)、独立の实在としては存在しない。存在するのは個物であり、普遍はその個物のうちに宿る形相として、しかも思考によって取り出される限りでの普遍として存在する。

第七章:なぜ「証明のいずれも真実らしくない」のか——一言だけ触れておく

問題文の後には「実相は存在するということが色々な仕方で証明されているが、そのいずれも真実らしくない」という一文が続く。これは今日の本筋ではないから深入りはしないが、一点だけ。

アリストテレスがアイデア論を退ける理由の一つに、「第三人間論」という有名な批判がある。「人間」というアイデアが、個々の人間と、そしてアイデアとしての「人間」自身に共通するがゆえに存在するなら、その共通性を説明するためにまた別の「人間性」を持ち出さねばならず、無限後退に陥る——というものだ。これは今日は詳しくやらないが、興味がある者は『形而上学』A巻9章を予習してきてくれ。次回、余裕があれば触れる。

終章:この対立、実は今も終わっていない

最後に一つ、大きな視点を提供して終わろう。

感覚的個物と普遍との関係をどう考えるかという、この論争は、実は中世に「普遍論争」という形で再燃する。実在論(普遍は実在する、プラトンの立場に近い)と唯名論(普遍は名前・記号にすぎない、感覚的個物だけが実在する)の対立だ。さらに言えば、20世紀の集合論やフレーゲの論理学における「クラス(集合)は実在するか、それとも便宜的な構成物にすぎないか」という論争にも、この構図はうっすらと影を落としている。

諸君が今日学んだのは、単なる古代ギリシャの骨董品の知識ではない。「一般的・普遍的なものはどのように実在するのか」という問いは、数学の哲学から言語哲学、さらには現代の人工知能における概念表現の議論に至るまで、姿を変えて生き続けている問題なんだ。

さて、問1の答案を書く際は、次の三点を必ず押さえてくれ。

1. プラトンのイデア論は、ヘラクレイトス的な流転説から論理的に導かれた分離の存在論であること。
2. アリストテレスのウーシアー論は、普遍・定義の必要性は認めつつ、それを個物に内在させる質料形相論であること。
3. 引用文中の「感覚されるもの」と「普遍的なものあるいは諸定義」の対比は、認識論的な非対称性(流転か不変か)が存在論的な対立(分離か内在か)へと拡張される、その転換点を示していること。

以上だ。今日はここまで。指でしか答えられなくなる前に、しっかり言葉で考える訓練を続けてくれ。それでは、また来週。